

墓と風土の関係性について

— 来間島を事例として —

Keywords

墓 風土 台湾
中国漢民族 隠宅



K08110 村井 茉莉子

1. はじめに

1.1 研究背景・目的

筆者は就職活動をするにあたり、住宅メーカーの商品を目にする機会が多くあった。そこでは、多くの住宅メーカーが全国各地で同じような住環境を実現することが可能であると謳っていた。それは日本の高い技術力の賜物といえる。しかし、それに伴い全国各地で同じような住宅が見られるようになり、住宅がその土地柄を反映していることは少なくなったとも言える。

そこで、筆者はより自然発生に近い建築に興味を持つようになった。そこで筆者は、注目すべき建築物について考えてみた。前にも述べた通り、住宅は全国各地で類似したものが多く、風土との関係性を見出すことは困難になりつつある。一方、墓は住宅に比べて、宗教や文化などの影響を強く受けている。また、形態が頻繁に変化していくものでもないで、その土地固有の風土に根差しているものであると考えられる。

本研究では、墓を死者の部屋または住居として捉える琉球風水の陰宅の考えに基づき、フィールド・ワークを行う。そこで得られた調査結果を、その土地の歴史、地理、気候、民俗方位、神話などに留意しながら研究を進める。そして、その研究を通し建築と風土の関係性について考察することを目的とする。

1.2 研究方法

本研究は、2011年7月25日～8月10日の17日間、沖縄県宮古島市下地地区来間で行った調査に基づいている。現地調査では、墓を主な調査対象とし、墓の実測と住民への聞き取り調査を行った。実測調査では、墓の平面図、立面図、島全体における墓地の配置図を作成した。聞き取り調査では、インタビューシートを用いて、墓参りや葬式の方法などについての調査を行った。これらの調査結果に加え、民俗方位観、歴史的背景、経済状況、地理的条件、伝承される神話などに留意しながら研究を進める。

2. 調査地の概要

2.1 地理・気象

来間島は、北緯24°から25°、東経125°から126°を結ぶ網目の中に位置し、沖縄本島の南西約303km、石

垣島から東北東133kmの距離にある宮古群島に属している。宮古島の南西約1.6kmに位置する来間島は、北東の方が高く、約40mの断崖絶壁となり、南側に傾斜して耕地が開け、周囲約8kmの海岸線は、屈曲はなくやや円い島となっている。



図1 調査地位置

また、宮古群島は高温多湿の亜熱帯気候に属し、平均気温は23.1度で、5月中旬ごろから6月中旬ごろまで続く雨季が明けると本格的な夏季を迎え、連日30度をこえる暑さが続く。また、観測史上まれにみる大型台風が来襲し、特に昭和34年に来襲した第一宮古台風（14号サラ）、昭和41年に来襲した第2宮古台風（18号コラ）は、日本気象観測史上最大の瞬間風速85.3mを記録している。

年間降水量は平均2033.1mmと比較的多いように見えるが、梅雨明け後の夏場は雨が少なく、台風が少ない年は早ばつの被害を受けることが多くなる。

2.2 歴史・文化

- 1470年 金丸が王位につき新しい琉球王朝になる
- 1637年 宮古・八重山に「人頭税」が施行
- 1776年 大飢饉
- 1791年 暴風（餓死約800人）
- 1816年 大飢饉
- 1836年 干ばつと台風
- 1871年 宮古島民遭難事件
- 1872年 琉球王国が琉球藩となる
- 1879年 琉球藩から沖縄県になる
- 1903年 人頭税が廃止される

- 1945年 英国艦隊、先島に艦砲射撃
- 1941年 第二次世界大戦勃発
- 1959年 第1宮古島台風（14号サラ）
- 1966年 第2宮古島台風（18号コラ）
- 1972年 日本復帰
- 1995年 来間大橋開通

先史時代の宮古・八重山諸島(以下、先島)は、日本本土や沖縄諸島と異なった文化圏に属していた。沖縄諸島までは、縄文・弥生文化の波及が認められるが、先島ではこれらの文化が確認されず、中国南部、台湾、フィリピンなどの南方から、文化が波及してきたと考えられる。先島で発見された貝斧は、フィリピンのドゥヨン洞穴からも確認されており、東南アジアとの関係が深い文化であると考えられる。

また、上で述べた通り、明治4年（1871年）には、宮古の貢納船が台湾に漂着して54人の乗組員が台湾原住民に殺害された事件、宮古島民遭難事件があった。さらに、明治13年（1880年）、日清両国間の外交上の取引として、琉球列島の宮古・八重山諸島を清国へ割譲しようとした際には、来間島の属する宮古・八重山諸島が挙げられた。その理由として、琉球列島の中で台湾に近かったためと述べられている。

以上より、先史時代から明治時代に至るまで、来間島の属する宮古・八重山諸島の文化は、中国と東南アジア、中でも台湾の影響を受けていると考えられる。

2.3 祭祀集団

来間島には、ブナカと呼ばれる祭祀集団が存在している。ブナカは、島に伝わる島建ての神話に基づいており、その物語に出てくる3兄弟を始祖とする。3兄弟それぞれの名前から、スムリヤブナカ（長男）、ウプヤブナカ（次男）、ヤーマスヤブナカ（三男）という。来間島では、すべての島民がいずれかのブナカに属している。

2.4 民俗方位

来間島には、民俗方位が存在している。北東が北というように、実際の方角（磁北）と45°ずれた方位観である（以下に記す東・西・南・北は民俗方位を示す）。また、東が上位であると考えられている。この考えは、住宅や集落にもみられる。例えば、来間島の住宅では南を前にして、東側に一番座と呼ばれる客間、西側に台所や家畜小屋を配置する。また、集落においては、分家した家は本家の西南の方角に建てられていることが多い。

3. 葬制

来間大橋ができてからは、宮古島の葬儀場で一般的な葬儀を行うことが多くなった。しかし、来間大橋ができる以前は、自宅で葬式を行っていた。以下に、それを記す。

はじめに、臨終を確認し、水浴せの儀礼や正装が済むと、死者を仏壇のある部屋に運ぶ。仏壇の前にゴザを敷

き、枕が民俗方位の南を向くように死者を寝かせる。その際、膝を折り曲げ、手は腹の上に置き、死に顔は白い布か手拭いで覆う。枕元には、日ごろ食べていた食事と着ていた服を置く。翌日の朝の野辺送りが始まるまで、この部屋に寝かせておく。また、僧侶に経を唱えてもらうのは、裕福な家庭のみであった。その代わりに、親類や近所の人が一晩中泣きながらその人の成仏を願った。

死者を仏壇の前に寝かせる際、本土では枕を北に向けるのが一般的であるが、来間島では枕を南に向ける。これは、来間島の民俗方位観に関係があると考えられる。来間島では南東が非日常的、北西が日常的な方角である。人が死ぬということは、非日常的なことではなければならない。よって、死者を寝かせる際には枕を南に向けるのだと考えられる。

4. 墓の概要

来間島の墓の形式や材料、配置が現在のようになったのは、約50年前からで、現在ではすべての墓がセメントで作られている。それ以前は、石を積み上げて作るドーム型のものが一般的であったが、来間大橋ができてからは、宮古島の石材会社に墓の建設を委託することが多くなった。しかしそれ以前は、ユイマールと呼ばれる集団で墓を手作りしていた。ユイマールとは、「助け合い」という意味で、困ったことがあると助け合うために自然と集まった人々のことである。これは、来間島に今でも根強く残っている意識である。また、その頃には墓を親戚同士で共有する共同墓も多く存在した。

今回の現地調査では、墓の実測調査を1基、墓に関する住民への聞き取り調査を40軒おこなった。そのうち、墓を親戚で共有する共同墓であると答えたのは2軒、一般的な家族墓が30軒、回答なしが7軒、その他1軒という結果になった。

4.1 墓の配置

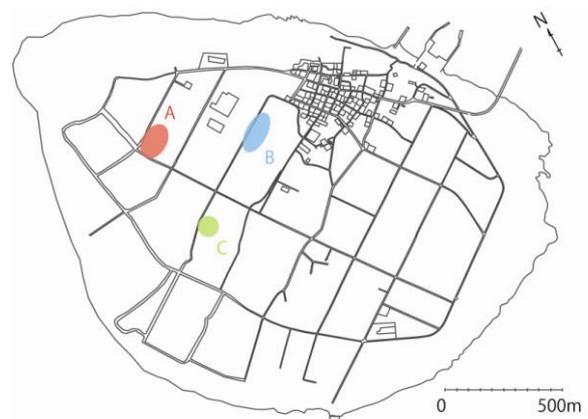


図2 墓の配置

来間島には、60基の墓が建てられており、それらは図2のように島の北西部よりに大きく3つに分かれて配置さ

れている。Aの墓地には31基、Bの墓地には7基、Cの墓地には22基の墓が建てられていた。

この墓の配置は、島の経済状況と気象に関係する。人头税という過酷な納税状況や、台風による農作物の収穫への影響など、来間島は決して経済的に豊かではなかった。そのため、土地を買う資金がある島民は限られていた。そこで、部落有地に墓地が作られることになった。部落有地とは、島全体の持ち物である土地のことである。部落有地に墓地を作ることによって、墓を持たない人が出ないようにした。その部落有地が図2で示した3か所であったため、このような墓地の配置になった。

4.2 墓の形態

大小若干の違いはあるものの、写真1のような形が来間島の一般的な墓である。墓の寸法は、奥行きが3920ミリメートル、幅が2970ミリメートル、高さが1990ミリメートルである。材料は、セメントとコンクリートブロックである。



写真1 来間島の一般的な墓

沖縄県の墓の形式は、岸壁などに横穴を掘って作られる横穴式の中の、人工的に穴を掘って作られる堀込型と呼ばれるものである。その中でも、亀甲墓（カーミヌクーパーカ）と破風墓（ファーファーバーカ）が多く見られる。一方、来間島では、亀甲墓はひとつも存在しておらず、すべての墓が破風墓であった。

また、来間島の墓は、破風墓の中でも唐破風墓という種類である。唐破風の特徴は、図3のように破風板が丸みを帯びており、中央部は弓形で、左右両端が反り返った曲線状になっている点である。さらに細かく分類すると、家形の唐破風墓に分類される。家形墓とは、本来岸壁などに横穴を掘り、その入口に破風型の屋根を設ける破風墓を、平地にセメントとコンクリートブロックで作ったものをいう。

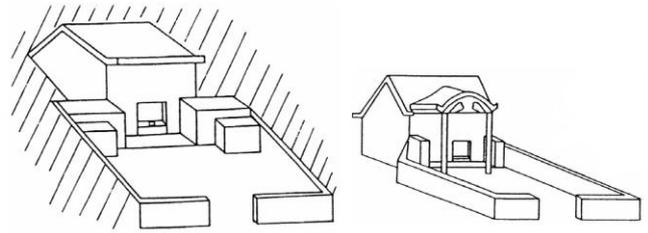


図3 破風墓（左）、家形の唐破風墓（右）

また、すべての墓が墓を囲むブロック塀の入口と棺を入れる入口が直線になるように作られている。そして、墓にはそれぞれ表札が付けられており、墓の所有者の名前と、屋号が記されている。

来間島の墓の形態は、台湾の影響と離島という地理が影響していると考えられる。

はじめに、墓の大きさについて述べる。来間島の墓は、本土のものと比べて明らかに大きい。これは、来間島では土葬が一般的であったので、遺体をそのまま墓に入れていた。そのため、大人の遺体が入るようにこのような大きくなっていったと考えられる。

次に、墓の形式について述べる。来間島を含む宮古諸島は、発掘された土器などから、縄文文化の影響はほとんど見られず、台湾の影響を多く受けていたと言われている。それを証明するように、台湾の墓の形式も主に、亀甲墓と破風墓である。では、なぜこの二つの墓の形式が来間島に伝わった時、破風墓が主流となったのか。これは前に述べた部落有地が大きく関わってくると考えられる。来間島では、部落有地という限られた土地を島民同士で分け合って墓地を作っていた。そのため、設置面積のより小さな破風墓が好まれたのだと考えられる。

次に、墓の表札に屋号が記されている点について述べる。来間島は離島であったため、島内に親戚が多く、同じ苗字が多く存在していた。よって、その家に住む人を苗字ではなく、屋号で呼ぶ風習があった。現在でも、その風習は残っている。そのため、民間の業者に墓の建設を委託するようになった今でも表札に屋号が記載されている。

また、墓を囲むブロック塀の入口と棺の入口が直線になるように配置されているため、住宅の門と玄関の入口が直線上にあることは、縁起が悪いと避けられている。

4.3 墓参りの概要

これまでの記述より、来間島では葬式が宮古島の葬儀場で行われるようになり、墓が石造りのドーム型からコンクリート造りの破風墓になったように、それぞれ変化してきたことがわかる。しかし、墓参りの方法は時代が変わっても変化していないという。ここでは、その墓参りについて述べる。

来間島では旧暦の1月16日をヒノエンマの日と呼ぶ。ヒノエンマの日は、本土にいる親戚も集まって、墓参り

をする日である。来間島の人々は、この日をとても重要な日と認識しており、たとえ台風が来ようともこの日の墓参りは欠かさないという。

墓参りの内容は本土とさほど変わりはなく、墓の掃除をし、線香を焚き、泡盛やお菓子、果物などをお供えする。本土と異なる点は、焼き紙をする点である。焼き紙とは、A4ほどの大きさのページュの紙で、一面に小銭模様が押し付けてある。この紙を20枚ほど墓の前で焼く。燃やすほどにあの世にいる親族が裕福になるといわれている。

墓参りで、唯一本土と異なる点が焼き紙であるが、これも台湾の影響であると考えられる。台湾でも焼き紙は墓参りの一環として一般的に行われている。

5. まとめ

これまでの記述から、来間島の墓の配置や形態、葬制や墓参りの方法などは、来間島の地理や歴史など様々な影響を受けていることが分かった。それら影響を与えたものを要素として作ったイメージ図が図4である。

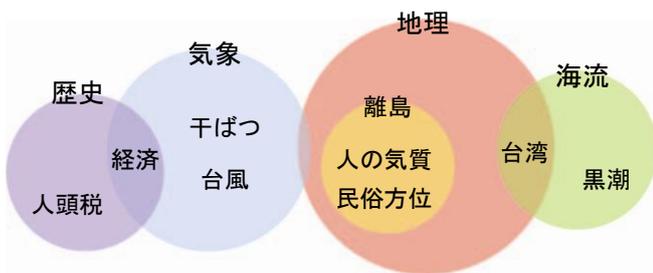


図4 来間島の墓に影響を与えた要素

特に、来間島の墓に大きな影響を与えたと考えられる台湾は、中国漢民族の文化の影響を強く受けている。そのため、台湾ではなく、中国漢民族の影響を受けているのではないかと考えられる。しかし、発見された土器などから、中国と直接的な関係があったとは考え難い。

一方、明治4年に宮古島の島民が台湾に漂着した宮古島民遭難事件からも分かるように、来間島を含む宮古諸島と台湾は地理的に近いこともあり、なんらかの交流があったと考えられる。来間島と台湾が地理的に極めて近いことは、図5からも読み取れる。また、宮古諸島近郊の海では黒潮の影響から、台湾から来間島、沖縄県に向けて潮が流れている。この潮の流れの影響により台湾の船が宮古諸島に漂流することも多かった。それにより、台湾の人と交流があったことが示される。

よって、中国から直接伝わったものではなく、台湾を経由した中国漢民族の文化の影響が多くあったと考えられる。



図5 来間島近郊の地図

6. おわりに

図4で示した来間島の墓に影響を与えたと考えられる要素は、来間島を構成する要素、つまりは来間島の風土そのものであるといえる。つまり、来間島の墓は配置から形式に至るまで、風土が作り上げたものであるといえる。逆に考えれば、来間島には風土というものが存在しているのである。

現代の日本では洪水の被害を抑え、山を切り崩し、気象条件や地理的条件までもが、技術の進歩によって管理されつつある。つまりは、日本の風土が均一化されているのである。しかし、どんなに技術が進歩を遂げて、均一化することのできないものが人の精神である。来間島に当てはめて考えてみると、先祖を敬う気持ちと、墓は死者の住居という考えである。敬うべき先祖の住居を小さく質素なものにすることや、墓参りを簡素化することは良いことではないという精神が、来間島の墓と風土の関係を保ってきたのではないだろうか。

均一化された日本の中にも、その土地の人の気質の違いなどは未だに色濃く感じられる。その精神をその土地の風土と捉えることが、風土と建築を結びつけるきっかけになるのではないだろうか。

参考文献

- 1) 谷川健一『日本の神々 神社と聖地13 南西諸島』白水社、2000年
- 2) 松井健『儀礼と口承伝承』国立民族学博物館研究報告・別冊、1986年
- 3) 下地町『下地町誌 1989年』下地町、1989年
- 4) アジアの墓地
<http://homepage3.nifty.com/asia-kenbunroku/Bochi.htm>
- 5) 沖縄観光学とははじめ
<http://www.res.otemon.ac.jp/~okuda/theses/kankougaku02to mb.htm>
- 6) 和辻哲郎『風土』岩波文庫、1979年
- 7) 下地町『50周年記念誌』下地町、1999年